
ななつ.....

ことぶきはじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ななつ……

【Nコード】

N2179Z

【作者名】

ことぶきはじめ

【あらすじ】

君島静奈が青井優に語る、学校で起こる怖い話。それをオムニバス形式で掲載していきます。

プロローグ（前書き）

怖い話が苦手な方はご遠慮ください。また一部残酷描写などもありますので、こちらも苦手な方はご遠慮ください。

プロローグ

ななつ……

作：ことぶきはじめ

なぜ彼女に声を掛けたのか。

声を掛けなかったら、彼女はずっと独りぼっちだったかもしれない……。

私を理解できる人間なんて、この世には存在しないのに、なぜか彼女は私を理解してくれそうな、そんな気がした。

もしかしたら、彼女は私が捜している人だろうか……。

だから声を掛けた。

おそらく、それが始まり……。

土曜日の正午過ぎの教室に、きみしましずな君島静奈はただ一人、本を読んでいた。

今にも降り出しそうな分厚い雲のヴェールが空全体を覆っているため、昼を過ぎたばかりだというのにやたらと薄暗く、静奈のいる教室も例外ではない。

教室の電気は点灯しているが、それでもこの陰鬱とした雰囲気を払拭することは出来ずにいた。

いつもなら校庭から聞こえる部活動の声も、この天気のため、開け放たれた窓からは僅かに聞こえてくるだけである。

静奈は湿った風を頬に受け、フウと嘆息する。それから「まったく……」と小さく呟いた。

視線を彷徨わせていた文庫本を閉じ、ゆっくりとした動作で窓際まで立ち寄って、窓を閉める。

本来なら帰宅部である彼女は、すでに下校していてもおかしくない。けれど、ここ最近の物騒な事件のせいで、彼女の兄である静^{しず}也^やが迎えに来る手筈となっている。

静奈の両親の帰宅はいつも遅く、その帰宅の遅い両親の代わりに何かと面倒を見てくれるのが、少し歳の離れた兄の静也だ。

静奈は兄の静也以上にしっかりしている。両親の信頼もある。けれど静也は妹の静奈をいつも心配し、なにかと世話を焼きたがった。静奈にしてみればそれが少々鬱陶しくもあったが、ここ最近の通り魔事件を考えれば、やや仕方のないことでもあった。それに兄の顔を見ないというのも何か寂しいものがある。

それでも、ここまで過保護すぎるのもいかなものか。とも思っており、兄に向かってそんな事を言えば、目を三角にして憤慨するかもしれない。

兄には少々シスコンの気があるのだ。頭の隅でそんな事を考え、閉じた窓枠に手を当てたまま、静奈は頭を振った。

英語や運動をえらく苦手としてはいるものの、全般的には成績優秀ではある静奈だが、料理は苦手の部類である。そんな静奈に対して朝昼晩と三食をきちんと準備する静也は、静奈にとっては必要不可欠な存在であった。

だから下手な事を言って機嫌を損ねるわけにはいかない。自分の生活環境を悪くしないために、以上のようなことを兄の前では口にしないでおこう、そう心に誓う。

もっとも、普段から表情の乏しい静奈の心の動向など、無頓着と朴念仁が服を着て歩いているような兄には、決して見破る事など出来ないのだが……。

クルリと身を翻し、自分の席へ戻ろうとする。その時、どこから

入ったのか分からない風に、長く艶やかな静奈の黒髪がふわりと舞上がった。

またか。そう思い周囲を見渡すが何も無い。やや乱れた髪を直して静奈は再び席に着き、読書を再開した。

窓を閉じてしまえば外界の雑音は全て遮断され、静奈の息遣い以外なにも音を発するものはない。

正面の黒板の上に掲げられている時計でさえも、静かに時を刻むだけである。ただ静奈の、本を捲る時の音だけが、この教室に存在していた。

十数ページほど読み進めたところで、ふと何かの気配を感じる。本をそのままにして顔を上げ、辺りを警戒する。

静奈の切れ長の目が、教室の片隅にいる人物を捉えた。

静奈は自分が、部屋に何者かが入ってきたのも気付かないくらいに読書に集中していたのだろうか、と小首を傾げる。

ズボラな兄の静也などであれば、十メートル先からでもその存在を感じることが出来るし、他の誰かが部屋に入ってくれば、静奈にはその気配が分かる自信があった。

だが、教室の隅にいる人物を確認すると、自分が気配を察するこゝとが出来なかったことに納得した。気配をなるべく感じさせないのは、彼女の得意技でもあったから。

「ようやく気付いてくれた、君島さん？」

気配を感じさせない得意技とは真逆に、その存在は他者の目を惹いた。

やや明るい色に染めた肩までの髪の毛は、軽くウェーブがかっており、相手を覗き見るような動作をするこの少女にはよく似合っている。

キョロキョロとよく動く大きな瞳に、小さな鼻、それに形の良い唇。頬にはソバカスの痕が存在するが、それがこの少女に愛嬌さを醸し出していた。

身長は静奈よりもやや高い。その彼女がズカズカと静奈の傍までやってきて、ズイツと身を乗り出して静奈の顔を覗き込んだ。

静奈も負けじと、じつと相手を見つめ返す。もつとも相手からすれば、睨まれている感じがするのだが……。

「何か用かしら？」

青井優。あおいゆうそれが彼女の名前だった。

優はおどけて肩を竦めてみせ、それから静奈の前の席の椅子に跨るようにして座り込んだ。

背もたれの部分に肘をつき、右掌に自分の顔を預ける。

「なーんかさあ、こう暇でさあ……」

気怠そうに、そして相手に対しては甘えるような声を出す。

今度はやや下方から静奈の顔を覗き込み、何かを期待するような視線を投げつける。

静奈はそんな優を一瞥すると、文庫本を閉じ、それを鞆に仕舞い込もうとする。

それを見た優が慌てた。

「ちょ、ちょ、ちょっと、なんで帰ろうとするわけよ！ それって

すごく失礼じゃない？」

「だったら青井さんも帰ればいいじゃない？」

「土曜日に早く帰ったつてしょうがないじゃない！ 君島さんだつて、暇なんでしょう？」

「ううん。忙しいわ」

「何でそんなにイケズなのよお！ 可哀そうなあたしに、ちょーつとぐらい付き合ってくれてもいいじゃない！」

「嫌」

淡々と素っ気なく答える静奈に、優はバタバタと腕を振り回す。構って欲しいアピールをしているのだが、目の前でそれをやられれば少々鬱陶しい。

両手をバタつかせる優を黙って一睨みする。その表情は綺麗なだけに迫力がある。優はそんな静奈の視線に耐え切れず、大人しく席に着いた。

その時、静奈の鞆の中から着信メールを報せる音が鳴った。鞆の中を漁る静奈を見ながら、優は椅子に座りなおして背凭れに両腕を預け、そこに顔を乗せる。

「君島さんつて、携帯持ってるんだ」

心底意外そうに、携帯を弄る静奈を見つめる。

「まあ、家族以外誰も電話しないけどね」

「ふーん。で、誰から？ 彼氏とか？！」

相変わらず人の話を聞かない奴だ。静奈は携帯を弄りながら、頭の隅でそんな事を考える。

その優はまたしても身を乗り出して、静奈の携帯を覗き込もうとする。

静奈はクルリと身体ごと相手に背を向けて、携帯画面を見られないようにする。

暫くの間無言でカチカチと携帯を弄り、それから携帯の蓋を閉じると、再びそれを鞆へと戻した。

「ねえねえ、誰からのメール？ やっぱり彼氏とか？」

興味津々、喜色満面といった感じで、静奈に問いかける。静奈は「違うわよ」と静かに相手の言葉を否定する。けれど優は引き下がらずにいない。

静奈は優がどうやら解放してくれそうにないので、渋々といった感じでメールの内容を話した。

「お兄ちゃんからのメール。迎えに来るのは4時を過ぎそうだって、そういう内容のメール」

「ふーん、そうなんだ。あつ、じゃあ、それまでは暇なんだ！」

優の瞳を見れば、その瞳の中がキラキラと輝いているのが見えた。静奈が黒板の上にかかっている時計を見ると、時計の針は1時20分を指し示している。

あと2時間40分。読書をするだけでは間が持ちそうにない。今読んでいる文庫本も、あと一時間もすれば読み終わるだろう。

それが少し勿体なく感じられるし、目の前の優を一人にしておく、こちらの読書の邪魔をしかねない。

「しょうがない」相手に聞こえないくらいに小さな声で呟くと、静奈は優の提案に乗ることにした。

けれど話題を提供できるほど、静奈は流行に敏感な方ではない。どちらかといえば一人でいることを好むし、またその方が気が楽だったので、あえて他人を自分のテリトリーへ入れることはしなかった。

自然と興味のあるものは、自分の世界観を構築するものだけとなってしまう。話題が少ないのはそのためだろう。

けれど静奈はそれでもよかった。自分を理解してくれる人物など、兄の静也以外存在しない。そんな思いがあるため、静奈はクラスメイトとは一定の距離を保って接している。

だが目の前に存在する青井優は、その距離を乗り越えて静奈と接していた。そういう意味においても、青井優という少女はかなり稀有な存在であった。

それはさておき、何か話題を提供できないものだろうか？ 静奈がそう思った時、向かいに座る優が、きつかけを作ってくれた。

「何か面白い話ってないの？」

優が瞳を輝かせ、静奈に尋ねてきた。

優は静奈が、優が知る限り他の色々な人物よりも沢山の本を読んでいるのを知っていたし、その沢山の中から何か面白い話でも聞きだそうと思っただけかもしれない。

だから特に意識したわけではないだろう。けれどこれは静奈にとつてありがたかった。

静奈は先ほどしまった携帯を思い出し、それからひとつ、目を閉じた。

「じゃあ、学校の不思議な話でもしましょうか？」

「えっ！ 学校の七不思議？ あの、……トイレの花子さんとかつてやつ？」

「それとは違うけど……」

「なーんだ、違うのか」

相手の落胆する表情を見て、静奈は薄く笑う。

「けど、実際にあった話よ。そういうのは嫌い？」

「怖い系の話？ それはちょっと苦手かも……」

「ふーん。じゃあ、私が読んだ本の話でも聞く？」

「どんなマンガ？ ジャンプ系だったら大丈夫」

「マンガじゃないわ。デユマ・フィスの……」

静奈が作品名を言おうとしたところで、優が待ったをかける。
難しそうな表情で右手人差し指を、自分のおでこにあてがう。その仕草がどこかコミカルで、愛嬌を誘う。

「やっぱり怖い話にして。難しい話は眠くなるから……」

「……………」

静奈は、真面目にそう言う優を、マジマジと見つめる。

それからコホンとひとつ咳払いをし、深く椅子に座りなおし頭を下げた。

演出だろうか、前髪が邪魔をして、静奈の顔が隠れてしまう。

「じゃあ、開けてはいけないメールの話でもしましょうか？」

下げた顔から、低く唸るような感じの声が聞こえてくる。

「えっ！ この学校って、そんな話があるんだ。私知らなかった！」

優は努めて明るく答えた。

「……………そうでしょうね」

またしても低く唸るようにそう言つと、静奈の顔がゆっくりと持ち上がり、その表情が露わになる。

優はその顔を見て、背中に悪寒が走るのを感じた。静奈の白い顔は、どこか無機質で、感情というものが読み取れない。

静奈の瞳が異様なほどに狂気の色を醸し出し、無機質なその表情はどこか能面のような畏怖を感じさせる。

本人には自覚はないだろうが、静奈は美人である。それこそ日本人形のような美しさがある。

その彼女がこういう表情をすれば、それは十分な迫力と、言い知れぬ恐怖があった。

優は静奈の発する狂気の視線から、抗うことが出来なかった。

静奈の白い顔にくつきりと浮かび上がる程に印象的な紅い唇が、ゆっくりと開き、物語を紡ぎ始める。

その声は、暗く沈んだこの教室に、ひとつの旋律として流れ出していった。

「これは私のお兄ちゃんが学生だった頃の話なんだけど」

プロローグ（後書き）

ゆっくりと連載していきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2179z/>

ななつ.....

2011年12月7日22時51分発行